
油断したら

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

油断したら

【Nコード】

N8769H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

シドニーに住むマーガレットは田舎での平和な暮らしに憧れていた。ところがそこにいる羊や山羊達はいえ。あるテレビ番組を見て思いついた作品です。

第一章

油断したら

マーガレットは最初こう思っていた。もう喧騒はないのだと。

彼女の生まれはシドニーだった。オーストラリアの経済の中心地であり当然ながら栄えている。しかし彼女にとってその繁栄は喧騒でしかなかったのだ。

「もううんざりよ」

ハイスクールの時にはもうこんなことをいつも漏らしていた。

「こんな騒がしい街。おまけにあちこちに危険があるし」

「危険って？」

「車は多いし犯罪者はいるし」

いつもこう女友達に漏らしていた。

「事故も多いし。一時も油断できないじゃない」

「考え過ぎじゃないの？」

「ねえ」

ところが友人達は誰もそう思っていなかった。呑気に彼女の言葉を聞くだけだった。

「幾ら何でもそこまで危なくないし」

「確かに色々な人達がいるけれど」

「合わないのよ、結局のところは」

マーガレットは溜息と共にここでこう言った。

「都会暮らしがね」

「じゃあ田舎に行くってこと？」

「本気で考えてるわ」

溜息を出したその口での言葉だった。

「何処かね。いい場所を見つけて」

「だったらすぐ見つかるわよね」

「ねえ」

友人達はそれを聞いて顔を見合わせて話すのだった。

「田舎なんてこの国じゃね」

「すぐに見つかるわよ」

「そうね。もうちよつと車で出たらね」

オーストラリアはあまりにも広い。その為少し車で街を出るとそこにはもう果てしない草原や砂漠が広がっている。そうした国なのだ。

「牧場にでも行ってみようかしら」

「いいんじゃない？それじゃあ」

「牧場で羊の毛でも刈ったら？」

「そうね」

友人達の言葉に頷くのだった。

「羊の毛をね。バリカンで刈って一日を過ごすのもいいわね」

「そうじゃない時は放牧してね」

「都会が合わないんだったらね」

「わかったわ。じゃあ少し旅に出てみるわ」

それから彼女は時間があるとオーストラリアのあちこちをバイクで回った。まだ車の免許を取れない年齢だったのでバイクだった。やがて車の免許を取ると今度は車で回った。そうしてハイスクールを卒業すると同時に北東部にあるある牧場に住み込みで働くことになった。そこに入ると。

「おやおや、これはまたいい娘さんだね」

「シドニーから来たんだよね」

「そうよ」

そこにいる村人達に笑顔で応える。

「もう街には嫌気がさしたし」

「シドニーは嫌だったのかい」

「ええ。都会よりこうした静かな場所で暮らしたいと思って考えていたことをそのまま述べるのだった。

「それでここに来たのよ」

「いいんじゃないか？それも」

「人間向き不向きってあるからな」

「なあ」

彼等は笑顔で答えるのだった。

「ここが合うんだっいたらここにいな」

「ずっとでもいいからな」

「有り難う」

彼等の言葉を受けて微笑み返すマーガレットだった。

「それじゃあ言葉に甘えて楽しませてもらうわ」

「おうよ、別嬪さんだし大歓迎だぜ」

「楽しくな」

実際のところマーガレットは豊かなブロンドで綺麗な青い目をしており背は高くスタイルもかなりいい。顔立ちも垢抜けていてやはり都会の匂いのする美人だった。

しかし彼女はもう牧場に入った。牧場での生活は確かに彼女に会っていた。彼女はその生活を楽しみ毎日を明るく過ごしていた。

「随分楽しんでるんだな」

「ええ」

同じ牧場に務めているオスカーの言葉に笑顔で応える。木の小屋の中でジーンズとブーツをはき三叉で羊達の餌の牧草を掻き分けながら応えている。

「そうね、毎日が楽しくて仕方ないわ」

「それは何よりだよ」

オスカーは彼女のその言葉を聞いて笑顔になった。

第二章

「やっぱりな。楽しまないとな」

「そうよね。素朴で空気もよくて」

「マーガレットはにこにこことしながら話す。」

「おまけに食べ物も美味しいしね」

「人情もあるってか？」

「ええ、それもね」

「つまり何処までも田舎の素朴さがあるということだった。」

「いい感じよね」

「羊や山羊はどうだい？」

オスカーは屈託のない顔で彼女に尋ねてきた。彼はマーガレットと同じく牧草を掻き分けていた。その動きは彼女よりも素早く力強い。手馴れたものがそこにあつた。

「あの連中は気に入ってもらえたか？」

「ええ、あの子達もね」

「当然ながら羊や山羊達も気に入らない筈がなかった。」

「皆いい子よね」

「そうか、いい子達かい」

「素直で素朴で」

満面の笑顔での言葉である。

「おまけに素直でね。いい子達よね」

「だろ？ただし気をつけなよ」

しかしオスカーはここでふと言葉を変えてきたのだった。

「あれで結構悪戯好きだからな」

「羊や山羊が悪戯するの？」

「するんだよ、これが」

オスカーは話すのだった。

「それも夕チの悪いことをな。するからな」

「羊や山羊が悪戯するって」
それを聞いても信じることのできないマーガレットだった。
「嘘でしょ」
「嘘じゃないんだよ、これが」
しかしオスカーは牧草を掻き分け続けながら話すのだった。
「かなり夕チが悪いんだよ、本当に」
「あんなにいい子達が」
「素直で優しい子供でも悪戯をするものさ」
オスカーの言葉は続く。
「思いついたらね」
「何かの間違いでしょ」
「そう言われても信じないマーガレットだった。
「そんなことするわけないじゃない、あの子達が」
「信じないのならいいさ」
オスカーはそんな彼女にまた言ってきた。
「まあ一つ忠告はしておくぜ」
「忠告って？」
「後ろには気をつけるんだ」
「こうマーガレットに告げるのだった。
「後ろにはな。背中にも注意しておくんだぜ」
「背中？」
「そうさ。いきなり来るからな」
「何故か少し楽しそうに話すオスカーだった。
「注意するんだぜ。充分にな」
「何か信じられないけれど一応覚えておくわ」
とは言ってもそんな筈がないと思っているマーガレットだった。
その時はそのまま牧草を掻き分けていた。こうしたことを続ける彼女にとっては楽しい日々が続きこの日もであった。マーガレットは羊達を連れて彼等を放牧していた。オスカーも一緒だ。
「なあマーガレット」

「何？」

「羊達に水を飲ませないか？」

広い草原で羊達を放牧させながら彼女に言ってきたのだった。今羊達は広く拡がりそれぞれ草を食べている。周りにはコリー達が見張りをしている。

「水を。どうだい？」

「そうね」

マーガレットも彼の言葉に応えて頷く。

「いい頃合いね。じゃあお池に行って」

「飲ませようぜ」

こうして羊達を池にやっていく。マーガレットはそんな羊達を見守っていた。しかしここで羊達のうちの一匹がふとオスカーの後ろに位置したのだった。

第三章

「あらっ!？」

マーガレットは最初にそれを見てまずは何かと思った。

「何でオスカーの後ろに？」

位置したのかわからなかったのだ。何故そこに。しかしその羊は羊達を誘導しながら池のそすぐ側にまで来たオスカーの後ろに来ていた。

マーガレットはそれがどうしてか首を傾げた。だが羊はここで思わぬ行動に出たのだった。

まず後ろに数歩後ずさった。そうして自分に気付いていないそのオスカーに対して突進する。そのまま。

何と頭でどん、と突いて彼を池に突き落としたのだった。オスカーは最初何が起こったのかわからなかった。池に落ちながら目を点にさせていた。そうしてそのまま池に落ちてしまった。

「な、何なんだ!？」

池の中から起き上がりながら言っている。当然ながらも濡れ鼠である。

「何で池の中に!？誰が突き飛ばしてくれたんだ？」

「羊よ」

マーガレットも今までの光景を見て呆然となっていた。まさか羊がそんなことをするとは夢にも思っていなかったのだ。しかもその羊はもう群れの中に入って何事もなかったように平然と水を飲んでいる。

「羊に後ろから突き飛ばされたのよ」

「何、またか」

オスカーはマーガレットの今の言葉を聞いてこう述べた。

「またやって来やがったのかよ」

「またなの」

「そうだよ、まただよ」

オスカーはマーガレットに答えながら池から出てきている。出ながら上着の箸を両手で絞ってそのうえで水を出している。勿論全身そんな有様である。

「言つたよな、こいつ等に後ろを見せたらつてな」

「狙われるつてことなのね」

「そうだよ。容赦しないからなこいつ等」

ここでやっと池を出た。出ながら羊達を忌々しげに睨み据えている。しかし当の彼等は全く平気な顔だ。しかもその突き飛ばして羊が最もそうであった。

「隙を見せたら本当に一瞬でな」

「物凄く悪質なのね」

「言つておくがこいつ等だけじゃないからな」

しかしオスカーはまだ言うのだった。

「山羊にも気をつけるよ」

「山羊もこんななのね」

「性格の悪さは同じだよ」

こつ言つてそのことを認めるオスカーだった。

「背中見せるなよ、絶対にな」

「ゲリラみたいなの連中ね」

ゲリラは民間人の中からいきなり背中を撃ってくる。だからこそ悪質なのである。あのアメリカ軍ですらベトナムではそれに悩まされたのである。

「全く。穏やかな顔をして」

「顔は穏やかでも性格は最悪なんだよ」

まだ言うオスカーだった。

「羊も山羊もな」

「わかったわ。じゃあ後ろには気をつけるわね」

「言つておくがいつもだぞ」

オスカーはこのことにも忠告しておくのだった。

「いつもだ。いいな」

「いつもって」

マーガレットはその言葉を聞くと少し首を捻った。

「そんなの仕事している最中でいいじゃない」

「まあそのうちわかるよ」

しかし今はこう言うだけだった。何はともあれオスカーはトランクス一枚になってそのうえで服を乾かしはじめた。彼にとってはとんだ災難だった。

それから一月程経った頃だった。マーガレットは自分が住んでいる家の大掃除をしていた。とにかくとてつもなく広い牧場なので彼女も家を一ツ貰ってそこに住み込んでいるのである。もっともその家は粗末なログハウスでありあちこちがたはきているのだが。

それでも家に一人暮らしなので満足していた。この日彼女は山羊の世話をしていたが思ったよりも早く終わったので家の掃除をしているのだ。

第四章

それがあらかた終わり最後に二階の家の窓を拭いた。それも終わった時だった。

不意にオスカーが家の前に来た。彼も山羊達を連れていた。マーガレットはその彼等を見て明るい笑顔で声をかけたのだった。

「オスカー、そっちも今終わったの？」

「ああ、後はこの連中小屋の中に入れて終わりだ」

「そう、じゃあ後で飲まない？」

窓から身を乗り出して飲みを誘う。

「ビールでも」

「あつ、いいな」

オスカーはそれを聞いて笑顔になった。顔は窓の彼女を見上げている。

「仕事が終わったらすぐにな」

「ソーセージでいいわよね」

「ああ。あつ」

しかしここでオスカーは声をあげた。

「おい、気をつけるよ」

そしてマーガレットに対して声をかけるのだった。

「行ったぞ」

「行ったって？」

「山羊が一匹家の中に入ったぞ」

このことを彼女に教えるのだった。

「今な。気をつけるよ」

「何だ、そんなことなの」

マーガレットは今の彼の言葉を聞いてもくすりと笑っただけだった。

「それならどうってことないわ」

「どうってことないの」

「ええ、山羊位いいじゃない」

それを聞いても特に気にすることのない顔だった。慣れていてももうように。

「そんなのいつものことだし」

「だから気をつけるって言ってるだろ」

しかしそれでもオスカーの言葉は注意する色のままだった。

「山羊や羊にはな」

「家の中で何言ってるのよ」

だがマーガレットの言葉はこの期に及んでもこんな調子だった。

「何もある筈がないじゃない。精々紙を食べられる位？」

「だから後ろだよ」

オスカーの忠告は続く。

「後ろ。気をつけるよ」

「大丈夫よ。家の中なのに」

「それが甘いんだよ」

「甘いつていうの？」

「そんなことを言っている間にもな」

まるで未来が見えているかのような言葉だった。

「後ろから」

「だから。今はお池の側じゃなくてお家の中なのよ」

そう言った矢先だった。マーガレットはいきなり後ろから何者かに突き飛ばされてしまい。そうして窓の外に弾き出された。屋根は幸いにして平たいものだったので下に転がり落ちることはなかった。しかし屋根の上で尻餅をついている彼女は呆然となっていた。

「まさか」

「ああ、そのまさかだよ」

オスカーはその呆然となっている彼女に対して告げた。

「窓見てみるよ」

「あっ」

オスカーの言葉に従い窓を見て思わず顔を顰めてしまった。何と

そこから山羊が一匹その白い顔を出していたのだ。実に平気な顔でマーガレットを見てきていた。

「わざわざ二階まで来て仕掛けてきたっていうの!？」

「そうさ。これでわかったな」

「わかりたくなかったけれどね」

この言葉に偽りはなかった。

「こういうことだったの」

「そういうことだよ。なっ、危ないだろ」

オスカーは下から笑って彼女に言ってきた。

「のどかな場所でも油断はできないもんだよ」

「そうみたいね。本当に」

マーガレットは苦笑いして彼の言葉に応えたのだった。後ろを振り向くとその山羊がつぶらな瞳で青空を見ていた。もう彼女のことを見ていないようである。何事もなかったかのように。

油断したら 完

2009・5・12

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8769h/>

油断したら

2010年10月8日15時10分発行